

運動機能障害のある子どもへの支援アイデア：映像視聴による影響

Various ideas for supporting children with physical disabilities : Effects of video image.

高原 光 恵

(キーワード：運動機能障害, 支援アイデア, 映像)

1. はじめに

学校教員や保育士、スクールカウンセラーなど、子どもに関わる職業を目指す学生は、授業を通して子どもの発達や指導法などさまざまな知識を学びつつ、授業の他にもボランティアやアルバイトを通して子どもと直接関わることのできる場に出向き、各自が子どもたちと直接関わる経験を重ねている。近年、共生社会の概念や特別支援教育の概念が広まり、保育・教育職志望者の誰もが障がいのある子どもと関わりがあることについて意識されてきたように思われる。そのため、特別支援学校教員や特別支援学級担任を希望する場合に限らず、障がいのある子への教育的支援について関心を寄せ、関連の内容を含む授業を履修するなど、自発的に学ぼうとしている学生も少なくない。また、大学としても、共通科目や全学の必修科目の内容として、特別支援教育に関するものを含めるなど、実際の保育・教育現場の状況に適応した科目内容が生まれつつある。しかし、そこでの学びは基礎的な知識の獲得段階でもあり、時間的な理由もあって知識的な学びが中心となることが多いであろう。

一方、多くの学生がより主体的に学びを深めるきっかけとなり得る授業方法の工夫のひとつとして、近年アクティブ・ラーニングが推奨されている。自ら問題意識を持ち、主体的に課題に取り組む手法として、期待できるものであろう。筆者の大学での授業実践として、これから学ぶ内容についてより具体的に問題意識を持ち、自ら考えつつ知識を取り入れて行くことができるよう、できるだけ子どもの日常の姿が感じられるものを意識した教材の活用を心がけている。しかし、子どもの日常の姿が伝わる視聴経験が具体的にどのような学びとして影響を及ぼすのか、客観的には把握できていない。そこで今回、特別支援教育に関連する想定場面での支援として、どのような視点・支援アイデアが思い浮かびやすいのか、映像教材の視聴前後における学生の回答内容について検討したのでその概略を報告する。

2. 目的

運動機能障害のある子どもへの支援として学生が思い浮かびやすいものにはどのようなものがあるのか、また具体的な子どもの日常の姿について視聴する機会を得た後にはそれらの内容に変化が見られるのか、あるとすればどのような点に関する変化なのか把握する。

3. 方法

対象：運動障害に関する内容を含む授業科目を受講する学生121名。

質問内容：想定場面として、以下のような内容が伝えられた。「来春、小学校へ入学予定の男の子。運動障害があり車椅子を使用。あなたが関係者ならどのような支援を考えますか？」

映像教材：バリアフリービデオ4部作（花王（株））に含まれる「みんな一緒 雅士くんの一学期」（約15分）を教材として用いた。二分脊椎で車椅子ユーザーの小学2年生男児の学校生活における様子が描かれている。普段の授業での同級生や先生とのやりとり、運動会や校外学習での様子、保護者の言葉の他、かつて同級生たちからかわれたときに男の子がどのように対処したかなど、ネガティブな状況が生じた場合についても扱っている。

手続き：以下の順に実施した。①質問への回答（筆記）、②映像教材の視聴、③発達に関する講義、そして最後に、④はじめの回答以外に気づいたこと・修正等があれば記載を追加するよう求めた。

4. 結 果

121名から回答が得られた。回答内容について、まず「関係者」としてどのような立場が想定されていたかについて示し、次に、映像視聴前の支援内容、視聴後の支援内容（追加・修正、気づき等）に関する記述について示す。

4.1 関係者として想定する立場

回答者が「関係者」として想定した立場についてまとめたものを表1に示す。立場が明記されていないものについては、記載内容（授業実施や学級経営に関することなど）から「教員」へ振り分けた。

表1 関係者として想定した立場

	立 場	件数
教 員	担任・教員	96
	管理職	6
	特別支援教育コーディネーター等	3
	スクールカウンセラー	11
	ボランティア	4
	保護者、児童等	3

最も多かったのは教員（105件：担任・教員、管理職、特別支援教育コーディネーター等）、次にスクールカウンセラー（11件）、学生ボランティア（4件）、その他（3件：保護者、児童等）であった。立場別に考え得る支援を記述した回答も見られたため、回答件数はのべ数である。

4.2 視聴前後の支援アイデア

支援アイデアに関する初回の回答について記述毎に抽出し、その内容毎に分類したものを表2に示す。

ローデータでは、「教員」の回答としては「物理的環境整備（学校内・教室内）」に関する支援アイデアが多く、「スクールカウンセラー」としての回答分類では、「物理的環境整備」、「連携（教員・保護者へのコンサルテーション）」、「心理的サポート」に関する記述が同程度に見られるといった特徴が見られた。ただし、表1に示されるように、「教員（担任）」の立場での回答が多数を占め、それ以外の立場からの回答数は全体として少なかったため、以後は立場毎の分類ではなく、すべての回答から内容分類したものについて述べる。

表2に示されるように、全体的に、校内のバリアフリー、特に移動・段差解消に関する記述が多く、車椅子ユーザーの児童というと移動面に関する配慮が思い浮かびやすいことが示された。スロープやエレベーターの他、階段昇降機に関する記述も複数見られ、近年の学校におけるバリアフリー環境の整備状況も影響している可能性がある。学校生活というと、授業・学習に限らず、生活指導・排泄（トイレ）や食事の環境整備も重要である。車椅子ユーザーが使えるトイレや教室との位置関係など、日中、子どもが長時間過ごす環境で想定される支援場面として排泄の問題は大きく意識されていることが示された。

また、可能な限りの整備を提案すると同時に、車椅子で通行できない箇所はマップに示し把握しておくことや支援体制整備による介助、助け合えるクラスづくりを目指すことなど、ハード面、ソフト面、両方の回答が見られた。

教室に関して、校内全体と共通して移動についての配慮に関する回答が多く見られたほか、車椅子対応の机の準備や、児童の板書作業時・学習道具の出し入れに関する環境整備など、小学校での活動場面を具体的に想定した記述が複数見られた。授業に関する支援として具体的に挙がっていた教科は体育であり、活動内容の工夫や参加形態に関する内容であった。また、移動に関する問題意識とも関連し、移動時間がかかる場合の授業進行における工夫や対応など、休み時間との兼ね合いに関連することも想定されていたことがわかった。映像視聴前の段階において、物理的環境整備をはじめ、支援体制などの人的環境整備、子ども同士の関係性を育てる学級経

営、心理面へのサポートなど、多岐にわたって支援の必要性が挙げられていた。心理面に関連する支援としては、不安や劣等感を引き起こさない支援といった若干抽象的な記述が多かったが、楽しめるスポーツ体験を増やす、スポーツできる環境を整えるなど、具体的支援方法につながる記述も見られた。

表2 考えられる支援内容（初回）：視聴前

内 容	具 体 例	件数
学校内の物理的環境整備	段差解消（スロープ、エレベータ、階段昇降機他）、トイレ、教室配置（1階、トイレに近い等）、支援機器の活用	128
教室内の物理的環境整備	座席位置・配置（スペース、動線確保）、机、ロッカー、整理整頓等	38
連携・支援体制	情報共有、相談・支援体制（教員、保護者、医療・福祉・行政等の専門機関）、登下校対応、加配・介助者	87
障害理解	障害理解教育、障害や車椅子についての理解を促す	47
学級経営	協力し合えるクラスづくり、係活動の工夫、いじめ・不登校の予防等	45
授業	体育での工夫（内容・実施方法）、時間配分（移動時間考慮）、個別指導の充実等	32
行事	運動会や遠足・校外学習での内容・実施方法等	11
心理的サポート	不安、孤立、劣等感、二次障害の予防、意欲など	10
研修・情報収集	車椅子の使い方や注意点、身体障害の知識、サポートに関する実績・情報収集	9
子どもの実態把握	心身の状態・原因・見通し、できること・できないこと	8
子ども・保護者の希望やニーズ	保護者の希望、子どもの意思	7
その他	自立を考慮した接し方・態度（見守り重視）	6
	スポーツ・楽しみ	2

表3 考えられる支援内容（追加・修正）や気づき：視聴後

内 容	具 体 例	件数
子ども同士の関わり・子ども同士の関係性	子ども同士が自然に関わり合う機会・助け合える関係性、仲間づくり	27
子どもの気持ち・主体性	子どもの意思・気持ちの尊重、自発性・主体性を促す支援	25
支援のあり方	見守りの重要性：自立を見据えた支援	22
環境整備	学習しやすい環境づくり、発達に適した環境調整	20
連携・コミュニケーション	学校全体での理解、専門機関との連携、コミュニケーションの大切さ	17
障害理解	他の保護者の理解、正しい障害理解はいじめ予防のためにも必要	12
行事	運動会や遠足：工夫次第との気づき、子どもたちとの相談が大切	11
実態把握	心身の発達状況、生活状況などの把握	7
支援技術に関する専門性	ICT 機器の活用、車椅子に関する学び	7
心理的サポート	子ども、保護者、支援者への心理的支援	3
その他	気づき：自己の視点、学ぶべきことの広さなど	14

次に、映像視聴後に、修正や補足として記載された2回目の回答について記述毎に抽出し、内容毎に分類したものを表3に示す。

二分脊椎があり車椅子ユーザーである男の子の日常生活が描かれた映像の視聴後には、視聴前と比べて、具体的な支援方法のアイデアというよりも、何のために支援が必要か、支援の前提となる気づきに関する言及が目立った。映像資料では、多くの子どもたちが自然に関わり合う姿、お互い自発的に協力し合う姿が映っていた。その姿に多くの回答者が望ましい状態と感じ、そのためにはどのような支援が考えられるのか、どのような力を育むことが必要なのか、安全面の確保についてはどういった体制が必要なのか、検討すべき課題も含めて、支援についてより具体的に考えを深めた回答が多かった。

保護者や周囲の大人が考え得る支援・配慮だけではなく、まず子ども本人の意思や気持ちを知り尊重することが大切であること、また、大人が支援者となる構図よりも、子ども同士で助け合い協力し合う環境を整えることの重要性への気づきが多く見られた。支援のあり方として、視聴前にも、直接的に介入する支援ではなく見守りの大切さを指摘する回答は見られたが、視聴後にはより多くの回答者から、子どもたちの発達を促す支援あるいは将来の自立を見据えた支援として、見守りが重要であることが指摘された。

5. 考 察

今回、運動機能に障害のある子どもへの支援として考えられることについて、日常生活での姿やクラスメートとの様子などを視聴する前後において、学生を対象に調べたところ、支援者の立場として想定されやすいのは学校教員、特に担任であることが示された。また、視聴前においても多くの支援アイデアが出され、その多くは客観的・物理的環境整備に関するもの、学級・学校全体での支援体制に関するもの、心理的配慮や授業の工夫の必要性など、さまざまであることが示され、学生それぞれが複数の視点から支援方法を探り、回答していたことが明らかとなった。

しかし、具体的な子どもの姿を知る機会でもあった映像教材の視聴後には、客観的な子どもの心身の状態・状況の把握の必要性はもちろんのこと、主観的な環境整備の向上（本人の意思確認、将来に向けた力を伸ばす関わり方の重視）に関する指摘や子ども同士が関わる機会の大切さ、子ども同士の関係性の重要さへの言及が増え、より子どもの内面への配慮や発達支援を行う際の根本的な部分について各自が考えを深めた様子がうかがえた。視聴前にも多くのアイデアを記載していたにもかかわらず、視聴後にはなお、自己の考えや視点が足りなかったこと、学ぶべきことはたくさんあることなど記述が見られた。直接の体験ではなく映像資料を用いた視聴経験ではあったが、実際の子どもの様子を知ることは、今後の学びへの意欲を促すきっかけとして大きな効果となることが示唆された。

6. 今後に向けて

観察や見学等の実習を含め、体験的な学びの重要性は各所で指摘されているところである。講義で得た知識とはまた印象も異なり、直接子どもの顔・表情の変化を見ること、直接声を交わすことから初めてわかることも多い。将来、子どもに関わる職業に就く教職・保育職志望の学生にとっては、直接的な体験、あるいはそれに準じた機会の拡大について確保して行くことは、重要であろう。しかしながら、時間的・地理的条件などから、日頃、障害のある子どもと直接関わる機会が得にくい学生も少なくないと思われる。そのため、直接的な体験の場の確保は工夫次第とも考えられる一方、直接体験に次ぐ学びの方法として、今回のような映像資料による経験でも、受講生へ印象を残す効果が十分にあると思われる。

近年は個人情報保護への意識・配慮が強く求められている。また、障害のあること自体をオープンにしていないうケースも未だに多い。そのため、さまざまな子ども達の様子が伝わる映像資料というと、限られた資料が中心になる可能性がある。しかし、顔や表情はわからなくても、子どもが喜んでいる様子や戸惑っている様子など、後ろ姿からだけでも感情が伝わってくることもある。また、子どもの愛らしい様子を多くの人に知ってほしいと思う保護者もいる。今後は、さまざまな状況・ケースの協力者への敬意とともに、記録された貴重な資料があれば、積極的に授業での活用を試みたいと思う。

注) 本稿は第32回リハ工学カンファレンスにて発表したものを加筆修正したものである。

Various ideas for supporting children with physical disabilities : Effects of video image.

TAKAHARA Mitsue

(Keywords : physical disabilities, supporter's idea, video image)

I researched the ideas for supporting children with physical disabilities before and after watching video image that showed some daily elementary school life. The participants were 121 graduate students. Before video view, many ideas about support were reported as follows : barrier-free design (e.g., slope, elevator, ground floor classroom), creation of a classroom environment (e.g., accessible table for a wheelchair user, keep a movable space), construction a support system / cooperation, education for understanding disabilities. After video view, increased contents were as follows : respect for a child's mind, the importance of children's relationship and child's self-direction, the necessity of the supporter's attitude so-called wait and see. The findings suggest that the learning effect of video image expressing the children's daily life is high about learning motivation and human rights awareness at least, even if it is not a direct experience.